聖隷学園報

発行者
学校法人聖隷学園
聖隷クリストファー大学・大学院
聖隷クリストファー中・高等学校

〒433-8558
浜松市北区三方原町3453
電話　053(436)5311
http://www.seirei.ac.jp

聖句

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。
（マタイ福音書六・二六）

◆座談会

「聖隷クリストファーの中高一貫教育と渋谷教育学園との連携について」

●聖隷クリストファー高等学校 校長
山下　峰雄

●聖隷クリストファー中学校 校長
大木島　宣弘

●聖隷クリストファー高等学校 教諭
●渋谷教育学園連携企画推進部長
内山　裕子

聖隷クリストファー中学校が開校して二年目。いよいよ来年度は中一から高三までが揃った中高一貫校になります。それに先立ち中学・高校では、中高一貫教育の先進校である渋谷教育学園との連携プログラムを本年度よりスタートし、充実した魅力的な学校づくりを進めています。そこで、聖隷クリストファーならではの中高一貫教育が現在どのように進行中で、今後がどのような教育を目指していくかについて、高校の山下校長、中学校の大木島校長、そして渋谷教育学園連携企画推進部長の内山教諭に語り合っていただきました。

中学校・高等学校が一体となって

――今年度から聖隷クリストファー高校の校長先生になられて、山下先生はどんなことをお感じになられましたか？

山下●毎日が朝の礼拝から始まるということを新鮮に感じました。中学生も高校生も一人一人をとても大切にしており、各段階で生徒が非常に成長しているのではないかと思っています。手厚く指導する体制が整いつつあると感じます。私は、ここの空間にいることで非常に安心でき、自分がやりたいことを精いっぱいできるという意味で〈クリストファーリゾート〉という言葉を掲げましたが、もう一つの〈誠実で、明るく楽しく、さわやかな学校〉ということとともに、これからも言い続けていこうと思っています。リゾート校長と言われてもいいかなと(笑)。

――**行事もいろいろありましたが。**

山下●聖隷祭については、かなり訓練されている感じがしました。わずか一週間でほとんどを

聖書のことば

聖隷学園宗教主任　鈴木　崇巨

右の欄で選んだ「聖句」をみると、神は空の鳥さえも一羽一羽を大切に養っているのだから、ましてあなたがた人間を一人一人大切に養わないことがあろうか、と言っている。疑い深い私たちは、はたしてそのようなことが可能であろうかと疑ってしまう。人類はあまりにも多いし、大統領からひき臼を挽く一人の女性やその横で眠る赤子にいたるまで、すべての人を平等にまた大切に見て養うことなどできるのだろうかと。

聖書の中では、神が人を細かく詳しく見ておられることを教えている。イチジクの木の下にいたナタナエルの話、イエスを知らないと言ってしまったペトロのこと、テコアという名も知れぬ所にいたアモス、母の胎にいた時から選ばれていたエレミヤなど。

人の目には不思議なことであるが、聖霊が全地・宇宙を行きめぐっているので、木の葉の一枚落ちるのも神は御存じなのだ。神はたしかに私たち一人一人を知り、養っていてくださる。人は皆神の前にかけがえのない一人一人なのだ。

仕上げていますから。これは換言すればそれぞれの教員のクラス指導ということになると思いますが、ともかく生徒たちの瞬発力、集中力には感心しました。

大木島●中学校は去年はTシャツコンテストだけの参加でしたが、今年は一年生がTシャツコンテストと合唱を披露し、二年生は学級展をやりたいということで、やはり一週間で仕上げましたね。なかなかエネルギーがあり中学生としては素晴らしいものが出来上がったと思います。やったことはお化け屋敷なんですが(笑)。子どもたちが発想したことをとにかくやらせてやろうということで、満足感と「やればできるんだ」という一体感を感じたと思いますね。

――中学校は二年目に入っていかがですか?

大木島●一期生たちは非常に元気が良く明るいので、試行錯誤をしながらの歩みでしたが、子どもたちに助けられたという面があります。そして二期生もいろんなことに挑戦しようという意欲がみなぎっていて、一・二年生ともに安心して思い切って学校生活を送っているという印象ですので、胸をなでおろしています。いよいよ来年三期生を迎えて中学一、二、三年と整うわけですので、それに向けて精力的に学校説明会や模擬試験を実施中で、本校のことが少しずつ理解されてきていると感じています。ただ、肝心の小学生を持つ保護者の方の間にはまだ十分に認知されていないようで、少し歯がゆい思いです。だからこそ我々が目指す教育の内容と方法、育てた生徒の姿で理解をしていただき、保護者の方々にもこの聖隷クリストファー中学校へ子どもを預けたいという気持ちになっていただきたい。そう努力したいと思っているのが中学校開設二年目の今の心境ですね。

――在学生の保護者の方々の反応や感想はどのようなものでしょうか?

大木島●年度末に調査をさせていただいたのですが、ほとんどの方が「安心して学校に預けることができます」という内容です。教育の内容については十分満足していただいているように思います。

山下●九月には体育大会があり、今年は中学校も初めて参加してくれました。そして、リレーに中学生のチームも参加したのですが、堂々の二位で高校生に勝ったんですよ。だから、すごい自信が出てきているわけですね。それから、先日の生徒総会で驚いたことは、中学校の二年の生徒が歴史探索の同好会「歴史探究部」を発足してほしいと提案して、それが認められたのですね。その設置理由を述べる姿が実に堂々としていました。

大木島●それから圧巻だったのは体育大会での「よさこいソーラン」ですね。中学一、二年生がそれぞれ地域の法被を着てみんなで踊ったのですが、「ソーラン、ソーラン」という掛け声を、周りで見ている高校生たちも一緒になって掛けてくれたんです。だからグラウンドが中学生の踊りと中高生の掛け声で一体となって、素晴らしい演技ができました。

山下●高校生にやらせたわけじゃないんですよね。自然発生的に声が出てきたんです。

大木島●涙が出るような思いでしたね。少ない中学生の集団を高校生が補ってやろうとみんなが力を出して、一体となったという感じがあって、リレーとともによかったですね。

――中学と高校がつながっていくような気風が表れているわけですね。

大木島●そうですね。少しずつ芽生えているというような感じですね。そして、今の二年生が高校の一年に入ったあたりからきちっとつながっていくのではないでしょうか。

渋谷教育学園との連携プログラム

――中学と高校をつなげていくための取り組みについて、内山先生いかがでしょうか?

内山●これは連携している渋谷教育学園から学んだことですが、本校では中一、中二をAブロック、中三、高一をBブロック、高二、高三をCブロックとするくくり方を推進していくことをまず考えています。Aブロックは学習の習慣をしっかりつける習得期、Bブロックは充実期で中三になったらもう高校生扱いをしていく、Cブロックは飛躍期で発展的に受験に向けての準備という形を取っています。

――渋谷教育学園との提携は具体的にはどのような形で行っているのでしょうか?

内山●一学期は全教員が渋谷教育学園に行き、一日研修を行いました。授業を見たり渋谷教育学園の先生のお話をうかがったり。そして夏休みにはその総括を兼ねて「より魅力的な中学校にするには」というテーマで研修会を持ちました。二学期はより発展的なシラバスの完成を目指して、教科主任を中心に再度研修に行く予定になっていますし、また渋谷教育学園の先生をお招きしての研修会も予定しています。

山下●クラス運営をする際に最初の一ヵ月が重要なように、中高の六年間でも導入期である中学校一・二年が特に大事です。そこで最初の全体の研修のテーマが「より魅力的な中学校にするには」だったんですね。今は主に中学校の教員、高校の教員と分かれていますが、この研修をしたことで高校は中学校の方を今まで以上によく見ることができるようになったと思います。自分たちの問題であるとみんなが捉えましたから、短時間でしたが効果的な研修でした。

内山●やはり中学が後からできたので、高校の教員は中学に関心が薄い、というところがあったんですね。それが、渋谷教育学園に行くことで「中高一貫校というものはこういうものか」ということを体感しました。教室もAブロック、Bブロック、Cブロックと並んで、配置から考えられているわけです。「中学・高校」ではなく、中三・高一がBブロックという一つのかたまりにしてあるということ、それを直接見て肌で感じてきたということが一学期の研修です。そして夏の研修でさらにそれが意識として深化されました。具体的に本校でどういうことができるかという研修だったんです。

山下●将来的には高校を担当している教員も中学生の方を担当してもらう機会が出てきます。基本的に本校の教員は中学と高校の両方の免許状を持っています。だからどなたも今年は高校、来年は中学校を担当していただくかもしれないという条件設定はできています。

大木島●実際、中学の先生は、一クラスしかない

わけですから今でも高校も教えていますし、高校の方からも来ていただいています。これを今後は全校挙げてやっていくことになると思うし、そういう意識づけが渋谷教育学園との連携の中で確かめられてきたということですね。それをどう具体化していくかということが今後の課題になると思います。

山下●公立の中学、高校ですと二つのブロックに大きく分かれてしまって、〈高一ギャップ〉という言葉があるように、その接続がうまくいかないという部分が確かにあるわけです。それがスムーズにいくということは、私学のなおかつ中高一貫の大きなメリットですから、それを今後本当にいろいろな意味で本校の強みとして使っていくべきだと思いますね。

――高校の生徒さんの意識はどうですか？

山下●今の中学生、高校生はタテ社会をうまく作れないんですね。それが六年間という広いスパンを設定することによって、自然に上下のつながりが生まれることを期待したいと思いますし、部活も中学生が入っているところもありますので、高校生が中学生の面倒を見ることができるという環境はありますよね。

大木島●対面式のときに中学生が高校生のいる体育館に入って行くわけです。去年も今年もそうだったのですが、高校生が発する第一声は「わ～、かわいい！」なんですね。高校の先生たちは中学生が高校生を見て萎縮するのではないかという心配があったようですが、その心配はこの学校には一切無くて、第一声の「かわいい」が象徴するように、部活動においても、温かく迎えてちゃんと面倒を見ていかなくてはいけないという意識が高校生の間に芽生えていると思います。懇切丁寧に導いてくれて、一体感が生まれていますね。この二年間に中学生と高校生の間のトラブルは一度もありません。これが、「隣人愛」のもとでずっと学校生活を送ってきている高校生の特性かもしれませんね。

山下●少し威張っている高校生が、中学生のいる集団では優しくなるという場面はいたるところで見受けます（笑）。高校生にとっても非常にいい勉強になっていると思いますね。

聖隷クリストファーならではの中高一貫

――聖隷クリストファーの中高一貫教育で求められる一番大切なことは何でしょうか？

山下●隣人愛についても、やはり高校から三年間ということより、中学校からの六年間のほうがそういう教えをさらに確固たる自分のものにできるということはあると思います。それぞれに宗教を越えて信じるものや尊敬するものはあると思いますが、それが本校ではキリスト教の精神にのっとっているということです。そういうところが徐々に生徒の身に沁み入り、後で考えてみると自分の人生の中で大きいと感じるのではないかと思います。

大木島●中学校では夕礼拝も行い、静かに目を閉じて一日を振り返って終わります。隣人愛の芽というのは少しずつ、しかし確かに育ってきていると思いますね。ただし中学の場合は求める学校像が「品位を高める進学校」ですので、その「品位」をもう少し子どもたちに自覚をさせていきたいですね。言葉遣いや礼儀作法、立ち居振る舞い、他者への思いやりや配慮、遠慮、謙虚さなどが自然に備わっている品の良さをきちんと育てたいと思います。それと同時に、高校に入ったら自分の進路に向かって頑張っていける基盤を中学では作らなくてはいけませんから、全員に一定以上の学力を保証することに力を入れています。ある基準に満たない場合は補充学習といってそれをクリアするように補習的な学習をします。それにプラスして、一定の基準をクリアしている子どもに対しては発展的・深化的な学習をどう仕組むかということをプロジェクトチームを組んで進めていきます。一定レベルを越えさせるためにはどうするか、越えた子どもにはどういう手立てを打ったらいいのかということを考えて、中高一体となって実践をしていく計画を今立てているところですので、今後実践されてくると楽しみです。

内山●一人一人の進路を大切にということですね。多様な学力の生徒に、それぞれの学力に応じて最大限の伸張を図るように六ヵ年かけて丁寧に見ていこうということで、プロジェクトができたわけです。

――六年間意欲を継続させるためにはどのような工夫をされているのでしょうか？

内山●そこが渋谷教育学園との連携で非常に参考になっているところです。学習指導、進路指導、行事などいろいろなものが本当に有機的に組まれ、それが全て出口につながっていくわけです。そういった一年から六ヵ年の行事、学習内容全てを関連づけたシラバスを今作っている最中です。

山下●学習面だけでなくて、行事やキャリア教育も含めての六年間の指導計画ですね。今、特別支援学校がいろいろ話題になっていますが、一人一人を丁寧に扱っていくというのが特別支援教育ですから、普通校においても特別支援の考え方で一人一人の子どもを大切にしていくということです。

――聖隷クリストファー大学との関係は？

山下●併設校ということに甘えることなく、さらに優秀な卒業生を大学の方にお願いできるようにという気持ちを持ち続けなくてはと思いますね。学園全体が一つ高いところを望んでいくというときに、高校生も中学生もその一翼を担っているという気概を持って指導していかなくてはいけないと思っています。

内山●社会に出て医療・福祉のリーダーとなっていくような人材を中学生のときから育てて大学につなげて、そして社会へという考えが根底にあります。

大木島●中学生は相当数が聖隷クリストファー大学へ行きたいとか、将来は医療・福祉の関係に就きたいというようなはっきりした目標を持って入学してきていますね。一年生が聖隷をよく知るために施設や病院を訪問する「聖隷探検隊」という活動もしていますが、これに行ってくるとさらに理解が深まります。

内山●高校の方では高大連携ということを行っています。医療・福祉の分野に将来就きたいという生徒を募って月に一回、大学に行って講義を受けたり、大学の先生がこちらに来てくださったりということをしています。

山下●私が驚いたのは、そういう生徒たちは、例えば言語聴覚士というような資格などについて、どういうものでどんな勉強をすればなれるか

聖隷クリストファー大学に進学しています。

——英語教育についてはいかがですか？

山下●普段の生活の中で英語を使った授業、英語イマージョンというものがあることに私もびっくりしたのですが、それを発展的に短期・長期の留学に結びつけたり、外国の方々との交流も非常にたくさん取り入れています。

大木島●中学二年生は、先日アジア学院へ行ってきました。アジア学院は栃木県の那須塩原にあり、アジア・アフリカ地域から三十人くらいが農業の研修に来ています。ここの共通語が英語なのです。中学生たちはその人たちと一緒にお祈りや食事や農作業をし、三日間過ごしてきました。片言の英語で筆談も交えたりして、なんとかコミュニケーションを図ろうという努力が見られましたね。十一月にはアジア学院の人たちが西日本への研修ツアーで大学も含めて二日間滞在してくれるので、そのときに交流会を開きます。外国へ研修に行くだけではなく、地域の中でもいろいろな方と交流することでグローバリゼーションを意識化させていこうというのが本校の一つの特色でもあると思いますね。

山下●夏休み前に短期留学でアメリカ・カナダの姉妹校のキャマス高校等から二十人程が来てくれて、そこで交流がありましたが、生徒たちはもじもじしていないんですね。それはやはり環境の為せるわざではないかと思いますね。

ということなどを全部知っているんです。そういう環境に身を置くことは非常に意味が大きいと感じますね。大体一割強の生徒が

大木島●音楽と体育を英語でやるイマージョンプログラムをはじめいろいろなところで英語を話す人に接していますので、子どもたちは英語に抵抗がないんじゃないでしょうか。

——修学旅行でも海外に行きますよね。

山下●海外はアメリカ・カナダ、ニュージーランドで国内は沖縄、北海道です。クラスごとではなくて、一人一人の希望に沿って行き先を決めます。

大木島●それはいいですね。中学は一クラスなので同じところに行きますが、三年の終わりごろにニュージーランドかカナダかイギリス方面を考えています。

山下●入学試験が無いからその時期に行けるんですよね。

大木島●アジア学院でファームワークをやってきましたから、外国に行ってもファームステイなど現地の人と一緒に農作業をするような体験も組み込みたいと思っています。

——労作の経験も生きてきますね。

大木島●労作は食、環境、福祉という三つのテーマで行っています。アジア学院では二日目に雨になって随分寒かったので、子どもたちは農作業をいやがるのではないかと思ったのですが、時間通りに集合して一生懸命やっていました。この子たちはすごい！と思いましたね。労作で鍛えてきているから働くことに何ら抵抗感が無いんですね。

山下●本当にいい経験です。先日、学校林の視察に一緒に行かせてもらいましたが、まだ間伐をするところがたくさんありますね(笑)。

内山●木を切り倒す経験なんてなかなか無いですから、感動しますよね。

山下●森林組合の専門家を頼んで教えてもらっていますが、植林や下草刈りまでやる学校はあっても、間伐までやる学校はなかなかないですよ。

大木島●間伐材を使って工作をさせたいと考えているんです。ベンチを作ったりとかね。

山下●体を使って作物を作って、ということは人間の基本じゃないかと思いますね。私も子どもの頃は家で農作業を手伝いました。田植えに始まり、秋の収穫後は麦を蒔き、冬の寒い時期に麦踏みをするんです。その一連の経験は自分のバックボーンのある部分を占めていると思いますね。それに似通った経験が労作でできているのではないでしょうか。

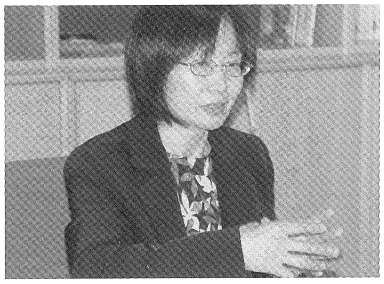
未来に向けて

——これから生徒たちに望むことは何でしょう？

山下●建学の精神を実践して豊かな人間性を身につけ、さまざまな場面で社会に貢献しようという心構えを備えて卒業していっていただき、将来的にそれが実践できたら、私どもはもうこの上ない生徒を生み出したということになると思いますね。

内山●高い志を持った生徒になってほしいと思っています。「〇〇大学に合格」ということだけを目標にするのではなく、〇〇大学に入って、そこで学んだことを、その後どうやって社会の中で還元し、貢献するかという高い志を持った生徒になってほしいと思います。

大木島●今の一・二年生は中学校の基盤を作る立場にあるわけで、その子たちが高校に入ると高校の大事な一翼を担うことになります。ですから、自分の良さを発揮して、自分にとって、あるいはこの聖隷クリストファー中学校にとって何ができるのか、何をすべきなのか。そして、大事な学び舎である学校を一番いい学校にするにはどうすべきか、という〈担い手意識〉を育てていきたいと思いますね。それが無い限り、「やらされている」という受け身的な発想になってきますから。だから、「自分は何ができるのか」をきちっと考えて、たくましく実践できるような人になってほしいと期待しています。



山下●中学校定員は七十名ですから、高校から入ってくる生徒は必ずいるわけですが、その中で中学校から聖隷で育った生徒がいろんな場面で核になっていくことを、一人でも多くに望みたいと思います。

大木島●高校生にお願いしたいことは、中学生のよい意味での見本になってほしいということですね。学習面、生活面、進路面でぴしっとした手本を示してもらうと中学生はそれを見習っていくと思います。品位という点でも高校生がきちっと範を示してくれるとよいですね。いろんな優しさを持っている高校生ですから、期待に応えてくれると思います。

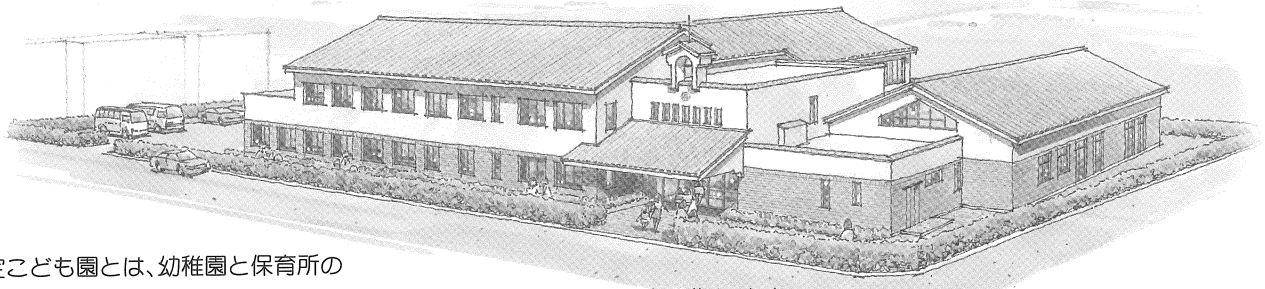
山下●渋谷教育学園との連携の一環で、生徒の派遣もしました。高校の生徒会長と副会長の二人が学園祭を見に行ったのですが、戻ってきて聞いたら、本校とそう変わらないという感想だったんです。要するに自信を持って帰って来たんですね。

大木島●それはこれからますます楽しみですね。

のびのびと力を発揮している中学一・二年生、中学生を迎えたことによってひと回りもふた回りも大きな成長を見せている高校生、そして、両者をつなげる取り組みを効果的に進める渋谷教育学園との連携プログラムの様子が、座談会を通して生き生きと伝わってきました。聖隷クリストファーならではの中高一貫教育がこれからどう花開いていくか、ますます期待されます。

聖隷学園 Topics

2011年4月、認定こども園「聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園」が開園します。



認定こども園とは、幼稚園と保育所の両方の機能を併せもつ施設であり、認可幼稚園と認可保育所からなる幼保連携型の認定こども園としては、県西部地域において初めての園となります。「キリスト教主義を基盤に、心身とも健やかなこどもの成長を育む園」を基本理念に、こどもたちが自然の中、多様でダイナミックな体験を通して活き活きとたくましく成長することを目指します。また、大学附属の園として、大学やその他の専門機関との連携により学問的根拠に裏付けられた質の高い保育・教育を実践していきます。

定員	0～2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
幼稚園	―	45	45	45	135
保育園	45	15	15	15	90
認定こども園合計	45	60	60	60	225

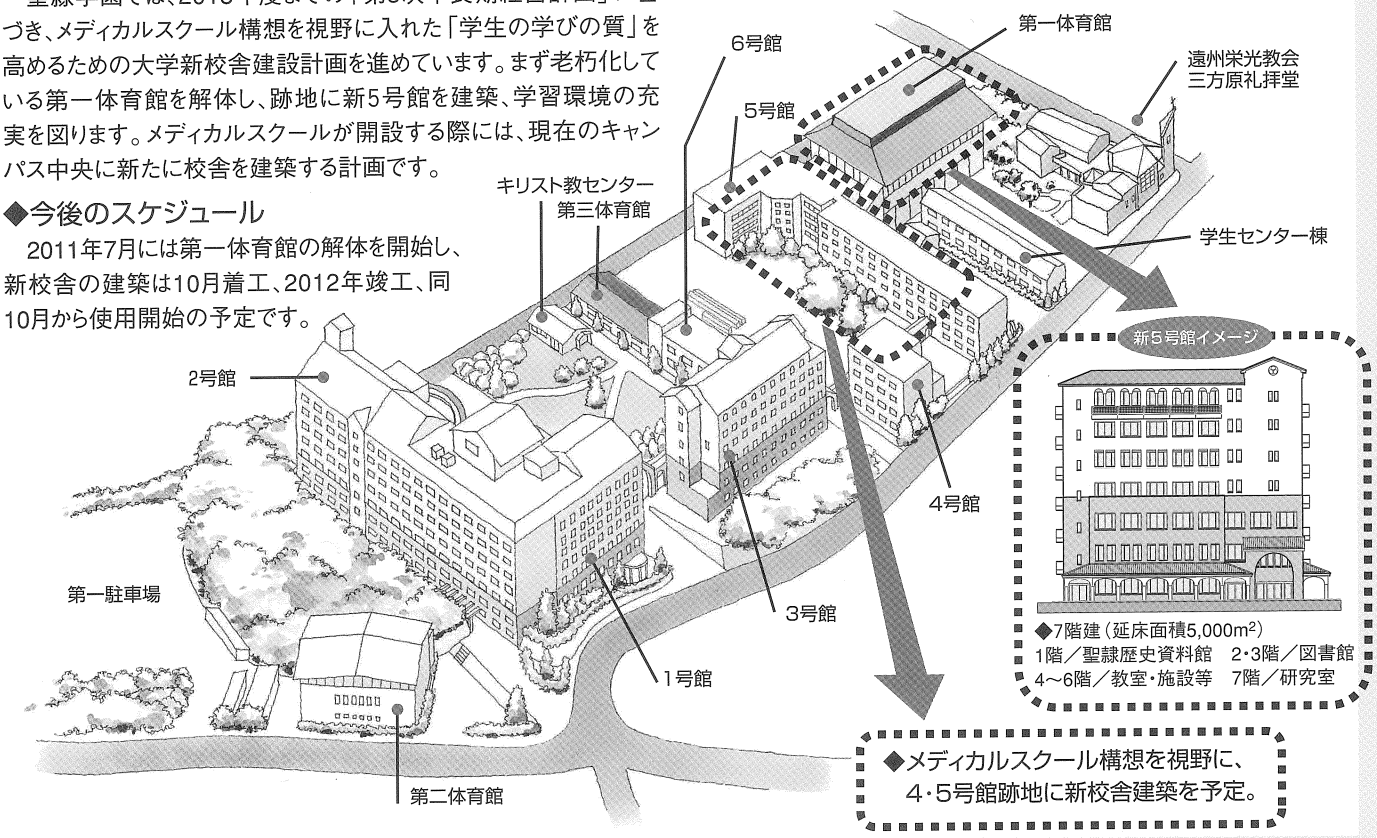
※3～5歳は幼稚園45人と保育園15人の計60人が1クラス30人ずつのクラスに分かれます。

◆大学新校舎建設計画◆

聖隷学園では、2018年度までの「第3次中長期経営計画」に基づき、メディカルスクール構想を視野に入れた「学生の学びの質」を高めるための大学新校舎建設計画を進めています。まず老朽化している第一体育館を解体し、跡地に新5号館を建築、学習環境の充実を図ります。メディカルスクールが開設する際には、現在のキャンパス中央に新たに校舎を建築する計画です。

◆今後のスケジュール

2011年7月には第一体育館の解体を開始し、新校舎の建築は10月着工、2012年竣工、同10月から使用開始の予定です。



◆メディカルスクール構想を視野に、4・5号館跡地に新校舎建築を予定。

聖隷クリストファー大学 Topics

さらなる教育・研究の質の向上をめざして

2011年4月より聖隷クリストファー大学は3学部7学科に大学院は区分制の博士課程（前期・後期課程）に改編、新校舎の建設計画も進んでいます。

大学院 それぞれの専門分野において教育・研究の一貫性をより強化し、かつ授与する学位を明確にすることを目的として、博士後期課程の「保健科学研究科」を、「看護学研究科博士後期課程」、「リハビリテーション科学研究科博士後期課程」、「社会福祉学研究科博士後期課程」に、既設の修士課程を博士前期課程に改編します。

大　学 社会福祉学部では、介護福祉士や社会福祉士となるための学びを土台に21世紀を担う臨床介護の実践家やリーダーを養成する「臨床介護福祉学科」を新設します。また、リハビリテーション学部においても、教育の専門性をより高めるため、理学療法、作業療法、言語聴覚の各専攻を学科に改組して3学科となります。

博士後期課程	博士前期課程（修士課程）	学部学科	
看護学研究科※		看護学部	看護学科
リハビリテーション科学研究科※		リハビリテーション学部	理学療法学科※ 作業療法学科※ 言語聴覚学科※
社会福祉学研究科※		社会福祉学部	社会福祉学科 臨床介護福祉学科※ こども教育福祉学科

※ 2011年4月改組改編

◆社会福祉学部　改組の内容

社会福祉学科　社会参加を支援する社会福祉士や精神保健福祉士を養成します。

- **マネジメント・ICTコース** …… ICT(情報通信技術)を活用した経営やマネジメントを重点的に学びます。
- **保健医療ソーシャルワークコース** …… 保健医療・福祉分野のソーシャルワークをメンタルヘルスや医学的知識とあわせて学びます。
- **アクティブ・ライフコース** …… 就労支援や自立支援の制度や方法、生活の質を向上する支援を学びます。

臨床介護福祉学科　21世紀を担う臨床介護の実践家やリーダーを養成します。

- **介護職管理者養成コース** …… ICT(情報通信技術)を活用した環境や人材のマネジメントを学びます。
- **介護系教員の養成コース** …… 介護系教員となるための指定科目や地域福祉・学生指導法を学びます。
- **病院専門介護福祉士養成コース** …… 病院介護に必要な専門科目を学びます。

こども教育福祉学科　総合的に子育てを支え、リーダーとなれる専門職を養成します。

- 子どもの健やかな成長・発達を支援するために必要な知識や技術の習得だけではなく、親・家族への支援、子育てしやすい地域環境づくりを学びます。

聖隷クリストファー大学 2011年度入試日程

看護学部 看護学科 ／ リハビリテーション学部 理学療法学科／作業療法学科／言語聴覚学科 ／ 社会福祉学部 社会福祉学科／臨床介護福祉学科／こども教育福祉学科

◎リハビリテーション学部で第2志望、第3志望の登録ができます。（一般入試）　◎2/3（木）一般入試（前期）は静岡・名古屋でも受験できます。

	区分	学部	出願期間	選抜期日	試験会場	合格発表
前期	一般入試	看・リハ・社※1	1/6（木）～1/24（月）消印有効	2/3（木）	本学、静岡、名古屋	2/10（木）
		社※1		2/4（金）	本　学	
	大学入試センター試験利用入試	看・リハ・社		個別試験はありません	―	
後期	一般入試	看・リハ・社	2/14（月）～2/22（火）消印有効	3/2（水）	本　学	3/8（火）
	大学入試センター試験利用入試	看		3/2（水）	本　学	
		社※2		個別試験はありません	―	

※1）社会福祉学部は2／3（木）と4（金）の両日受験可、試験日も自由選択でき、学科の併願もできます。※2）社会福祉学科、臨床介護福祉学科のみ実施します。

◆お問い合わせは《入試・広報センター》へ　TEL. 053-439-1401　FAX. 053-439-1430　http://www.seirei.ac.jp　E-mail:cl-entrance@admin.seirei.ac.jp

聖隷クリストファー中・高等学校 2011年度入試日程

	出願期間（必着）	選抜期日	合格発表	入試手続期間
中学校（後期）	1/14（金）～1/20（木）	1/23（日）	1/27（木）	1/28（金）～1/31（月）
高等学校	1/27（木）～1/28（金）	2/3（木）・4（金）	2/14（月）	単願2/15（火）～2/16（水） 併願3/15（火）

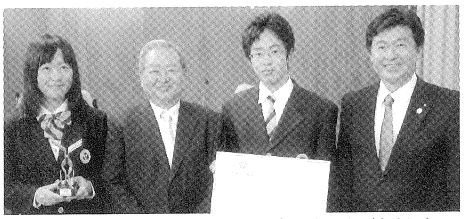
聖隷学園 Topics

ブラジル希望の家 創立40周年記念式典訪問

8月20日に開催されました「ブラジル希望の家」創立40周年記念式典に、学園から堀口路加専務理事、中・高等学校の大野和男教諭と高校生2名、遠州栄光教会から森田恭一郎主任担任牧師と秋葉保長老（元聖隷クリストファー高等学校校長）が出席し、高校宗教部、教職員からの献金US$2,100をお持ちしました。ご協力いただき誠にありがとうございました。

サンパウロ市議会貴賓室で行われた記念式典には、サンパウロ市議やブラジル希望の家関係者、各福祉団体関係者ら約200人が出席する盛大な会となりました。

創立者の市川幸子氏をはじめとする先人への黙祷、聖州軍楽隊による日伯国家吹奏に続いて、希望の家の40周年の歴史を綴ったビデオが上映され、その後、聖隷学園をはじめとする15の個人および団体に対してサンパウロ市議会から功労賞が贈呈されました。功労者を代表して堀口路加専務理事が謝辞を述べ、希望の家の活動を激励されました。



▲市議会から功労賞の賞状と記念品をいただきました。

翌22日にはサンパウロ市近郊イタクアケセツーバにある希望の家で記念フェスタが行われ、森田恭一郎主任担任牧師が「希望の家が全国の障害者と家族の『希望』となりますように」と祈りを捧げました。

ブラジル希望の家福祉協会 創立四〇周年記念式典あいさつ

学校法人聖隷学園 専務理事　堀口　路加

本日ここに希望の家福祉協会創立四〇周年を迎え、祈念式典がこのように盛大に執り行われましたことに心よりお祝い申し上げますとともに、お招きくださったサンパウロ市議会の皆さまに御礼申し上げます。

●聖隷グループの歩みと歴史を通して受け継がれてきた心

聖隷の創設者長谷川保は一九二一年高校を卒業後、ブラジルで大コーヒー園主になる夢を抱いて日本力行会海外学校に入学。そこでキリスト教に出会い、お前は日本にとどまり、日本民族の救いのために働けという神の啓示を聞きました。長谷川保一八歳の時のことでした。

それから数年後、約十名のクリスチャン青年と社会事業を目的として聖隷社を創立。一九三〇年、長谷川保二七歳の時に、結核を患い、どこに行っても感染を嫌われ、追い出され、行くあてがなく、もう天地の間に身の置き所がない、もう自殺するしかないと言って、父親と共に、泣いて訪ねてきた一人の青年を引き受けたことで聖隷の将来が方向づけられました。ブラジルにおける結核事情はよくわかりませんが、今では当たり前の抗生物質もその当時の日本にはまだない薬で、結核にかかればその多くは死に至る時代で、結核患者を受け入れて共に生きることは、本人だけでなく家族や子どもにも感染の恐れがあり、また結核患者ともども、迫害される側に立たされることでもありました。

現在、聖隷学園や聖隷三方原病院をはじめとする多くの施設のある静岡県浜松市三方原の地は、激しい迫害の末に四度目にやっと得た土地であり、日本全国のキリスト教会と信徒の応援により得た土地なのです。こうした困難を支えてきたのは、貧困と迫害と困難の中でも揺らぐことのなかったキリスト教信仰であり、全ての働きはただキリストのご栄光をあらわすためのものであり、神様と人とに仕えることに徹した生き方、苦しみ悲しみの涙にくれる人々と共に生きようとする愛の心でした。

市川幸子先生が、日本のキリスト教会に助けを求めてこられ、長谷川保が実際に希望の家の窮状を視察して市川幸子先生の働きを目の当たりにした時、希望の家の厳しい状況が、貧困と迫害の困難な聖隷の草創期の姿と重なり、「聖隷はこれまでたくさんの人たちに助けてもらった。今度は自分が希望の家のために働かなければならない。」と自らが希望の家のための募金活動に立ちあがったのでした。

●弱い者、強い者、最も小さな者の一人にしたのは・・・・

聖隷グループの中にも知的障害者を守る小羊学園という施設があります。その創設者である山浦俊治という人がこんなことを言っていました。「強い人の周りには人が集まる。でも強い人の周りに集まる力は強さを競いあい、争いにつながり、戦争へと発展する。弱い人の周りに集まる力は愛である。愛は平和につながる。だから小羊学園の仕事は単に障害者のための仕事ということを超えて、平和運動である。」と。

最も小さな者の一人にしたのはすなわちキリストにしたのと同じであるという言葉を皆さんは知っています。社会的に、経済的に、健康的に強い立場にある私たちが、希望の家で助けを必要としている人たちにすること、又経営的に厳しい希望の家に対してすることはキリストにすることと同じなのです。

●希望の家にとっての課題と将来展望、受け継いでいく心、一致するところ

創立四〇年を迎えた希望の家、お聞きするところでは入所者の高齢化の問題、社会的孤立の問題、後継者の課題、経済的な課題など、課題や困難が多くあるとお聞きします。でもどんな仕事でも困難が伴うものです。そうした困難に耐え、打ち勝つための支えは「何のためにこの仕事がはじめられたのか」をいつも忘れず、原点に立ち返ることに尽きると思います。

長谷川保は生前こんなことを度々言っていました。「世の中が本当に必要としているものは、必ず実現する。世の中が変わって、存在できるようになる。これほど確実なことはない。周りの人は金がもうかるというとすぐやるが、そんな事業はいずれ廃れてつぶれてしまうもんだ。つぶれる事業はもともと世の中のニーズに合っていない、必要とされていない事業だからつぶれるんだ。世の中が必要とする限り、成り立つ。そのためにどんなに苦労しても、絶対につぶれることはない。」、「どうにもならなくなって、初めて道は開くものだ。道のなかったことはない、道は必ずついてくるものだ。」、これらは創立四〇周年を迎えた希望の家のこれからに向けて送りたい言葉です。

この言葉の通りに生きるのは決して楽なことではなく、苦しいことの方が多い。けれども神様の祝福が必ずそこにはあることを信じています。

●一人の力、一人から始まる力

今日の午後、移民史料館を見学いたしましたが、約九十年前、長谷川保がコーヒー園主になる夢をかなえてブラジルに渡っていたら、今の聖隷はなかったでしょうし、市川幸子先生がいらっしゃらなかったなら今の希望の家もなかったことでしょう。

このお二人の働きを改めて見つめ直す時、一人ひとりの力は小さいけれど、その一人の力が神様に用いられたなら、人間的には大変な苦労と困難はあっても、必ず大きな仕事、意味のある仕事になるということを私たちは今日ここで確認したいと思います。その仕事を私たち後に続く者たちがどう継承していくか。どのように一つ思いとなって盛り立てていくのかが大きな課題です。

近年ブラジルの経済は素晴らしい成長を遂げていることを知っています。かつて日本が戦後経済の復興に国を挙げて努力し、著しい経済成長を遂げたころ、「元気に働けること」、「より多く稼げること」が大切にされ、「経済的に裕福な生活をすること」が人生の目標とされた時代がありました。しかし本当の豊かさや幸せは経済的な豊かさだけでは得られないこと、本当に大切なことは人と人とが支え合い、分かち合って生きる中にこそあることを皆さんは知っているはずです。「これから先も、希望の家で暮らす人たちが、それぞれの親が亡くなり、年老いても、普通に生きていくことができるようにすること」、それが希望の家の目標ではないでしょうか。

希望の家の働きとそこに生活する人たち、その働きを担う役職員、支援する方々が、これからも「愛」と「希望」と「信仰」によって一致していくことができるように心から祈り願い、希望の家福祉協会創立四〇周年記念のお祝いのあいさつとさせていただきます。

服部　証子（生徒会 会長／高校2年）

私が希望の家を訪れてまず初めに感じたのは施設全体を包み込んでいる温かい雰囲気です。職員と入居者の方々はまるで本当の家族のようで、見ている私まで笑顔になりました。また驚いた事は希望の家の清潔さ、手作りで整えられた設備、そして障害の状態ごとに用意された豊富なリハビリのメニューです。一人ひとりの入居者への職員の方々の思いがここからも伝わってきました。

今回、希望の家を支援している日系の方々から、ブラジルへの移民の歴史や困難、またブラジル希望の家の働きについて話をお聞きする機会が多くありました。そのことを通して私は将来、両国の懸け橋になりたいと強く感じました。生徒会としても、これから希望の家と何らかの形で繋がりをもっていきたいと思っています。

稲垣　奏（生徒会 副会長／高校2年）

ブラジル希望の家では、入居者の両親をはじめ、多くの方々がボランティアとして関わられていました。見学や式典を通して、ボランティアの方々は仕事もある中で、本当に希望の家のことを考えて、関わられていることを感じる場面が多くありました。また希望の家の設立時、聖隷の長谷川保先生が日本の企業を一つ一つ回り、寄付をつのり、一億円以上の寄付を集めて送ったことが、経済面だけではなく、精神的にも設立の大きな支えとなったそうです。施設の利用者の方々がとても活き活きとして見えたのは、その様に色々な人の善意で成り立っているからだと思いました。これからも活動を続けるために、私たちもどうしたら支えていけるのかを考えていきたいと思います。

2009年度決算における財務状況および2010年度補正予算の概要

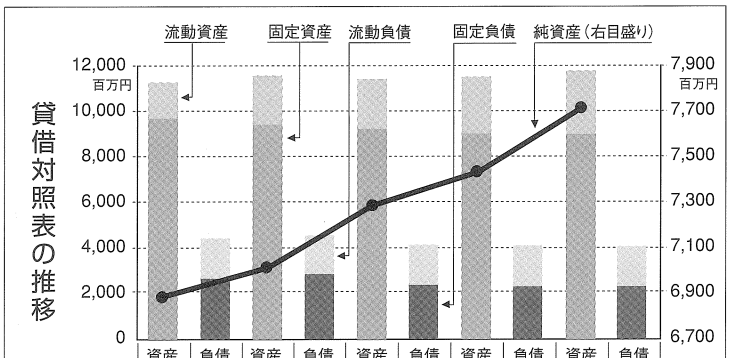
◆2009年度決算について

1.法人全体として、財務状況は中長期財務計画を上回って改善を進めています。新規事業は中長期経営計画に基づいて推進しており、学校法人全体の収支はプラス9.2%（帰属収支差額比率）と計画を上回っています。（大学法人の全国平均値は0.8%です。）

2.貸借対照表は資産（土地、建物など）が何によってどのようなバランスで賄われているかを表し、財務の健全性を示すものです。2009年度末における有利子負債は20億7700万円ありますが、総資産の65%は自己資金で賄われていることにより、財務の安定性には十分な余力があります。また、借入金は現状のキャッシュフローにおいて最短3年5ヵ月での全額返済が可能であり、十分な返済能力を備えています。

3.大学の収支は安定した状況を継続しています。「帰属収支差額比率」は19.5%のプラスとなりました。（大学部門の全国平均値は5.1%です。）新規事業として今年4月には看護学部養護教諭課程を開設しました。更に2011年4月の認定こども園開設、2012年8月完成予定の新5号館建築他の計画を推進しており、何れの計画も中長期財務計画に沿って進めることが可能と判断しています。

4.高等学校の収支はマイナスで推移していますが、2009年4月から新たに中学校を開設し中高一貫教育を開始しました。6年間を見通したゆとりある教育課程の中で確かな学力と豊かな人間性が身につけられるよう指導を行っています。今後は中長期計画の推進により教育の質を一層向上させるとともに、中・高等学校として財務改善を進める計画です。



年度	2005年度 資産	2005年度 負債	2006年度 資産	2006年度 負債	2007年度 資産	2007年度 負債	2008年度 資産	2008年度 負債	2009年度 資産	2009年度 負債
流動資産	1,586		2,146		2,176		2,496		2,772	
固定資産	9,660		9,390		9,204		8,986		8,962	
流動負債		1,760		1,693		1,759		1,793		1,756
固定負債		2,619		2,814		2,336		2,269		2,267
純資産	6,867		7,029		7,285		7,420		7,711	

固定資産	土地、建物、機器備品、図書、奨学貸付金、出資金、施設利用権、敷金など
流動資産	現金預金、未収入金、前払金、立替金
固定負債	長期借入金、退職給与引当金
流動負債	短期借入金、前受金、未払金、預り金

2009年度決算について、詳しくは学園ホームページ（http://www.seirei.ac.jp/gakuen/）の財務計算書類、事業報告書をご覧ください。

◆経営判断指標に基づく学校法人経営状態の区分

日本私立学校振興・共済事業団では、適切な指導を行うために学校法人の経営状態を定量的な指標により7つに分類しています。2009年度決算についてこの指標に基づき自己診断したところ、本学園は引き続きA2ランクに分類され、財務状況は正常な状態にあります。今後も単年度毎の教育研究環境の改善を図ると共に、中長期計画に向けた財務環境作りを推進する考えです。

	経営困難状態（レッドゾーン・イエローゾーン）				イエローゾーンの予備的段階	正常状態	
判定	B4 いつつぶれてもおかしくない	B3 在学中に破綻の可能性	B2 蓄積資金を食ってなくなれば破綻	B1 黒字だが借金が過多	B0 B1の一歩手前の段階	A2 黒字だが設備更新を行なうには不十分	A1 設備更新ができる十分な黒字

判定の指標：①教育研究活動による現・預金の増減が赤字（2年連続）か、黒字か
②借入金等外部負債超過額を10年で返済することが可能か、不可能か
③帰属収支差額が赤字（2年連続）か、黒字（黒字幅が10%未満、以上）か

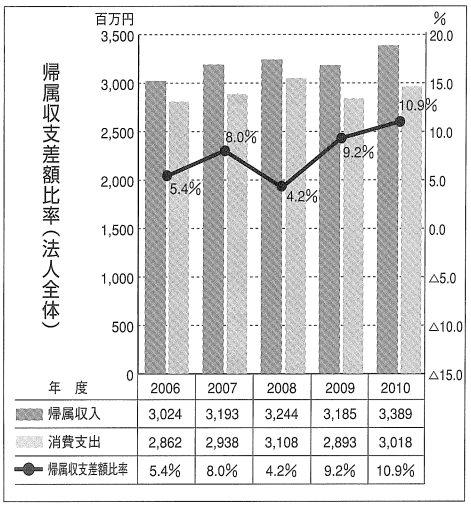
◆2010年度補正予算について

1.当初予算に計上していた第三次中長期計画に基づく新規事業のうち、「認定こども園開設」については2011年4月開設の予定通り実施し、大学の「第一体育館解体工事」および「新5号館建築工事」を2011年度に繰り延べました。その他要因を含め収支は当初予算より2億4570万円改善し、法人全体として3億7000万円（帰属収支差額比率10.9%）のプラスとなる見通しです。

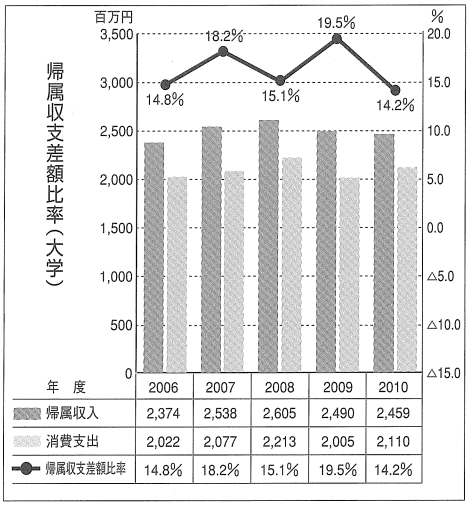
2.大学では、入学者増に伴い1067万円の新規財源を計上し、教育用の機器備品や教材の購入に充当しました。大学部門の収支は新規事業の繰り延べに伴い当初予算より2億3300万円改善しますが、この財源は2011年度に繰り越し、「第一体育館解体」および「新5号館建築」の新規事業を進めることになります。

3.高等学校では、校舎隣地15,680m²を2009年度に「労作」用地（7,370m²）として、更に今年度は「グラウンド」用地（8,310m²）として取得しました。何れも日本私立学校振興・共済事業団から融資を受けています。グラウンド用地は「ソフトボール場」としてすでに整備を終え、11月から部活で使用しています。

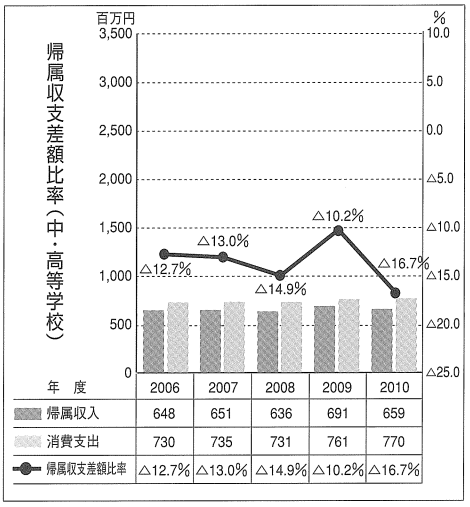
4.法人部門では、2011年4月に開設する「認定こども園」の準備を進めており、園舎建築等の事業費6億7000万円および補助金収入2億7000万円を計上しています。



年度	2006	2007	2008	2009	2010
帰属収入	3,024	3,193	3,244	3,185	3,389
消費支出	2,862	2,938	3,108	2,893	3,018
帰属収支差額比率	5.4%	8.0%	4.2%	9.2%	10.9%



年度	2006	2007	2008	2009	2010
帰属収入	2,374	2,538	2,605	2,490	2,459
消費支出	2,022	2,077	2,213	2,005	2,110
帰属収支差額比率	14.8%	18.2%	15.1%	19.5%	14.2%



年度	2006	2007	2008	2009	2010
帰属収入	648	651	636	691	659
消費支出	730	735	731	761	770
帰属収支差額比率	△12.7%	△13.0%	△14.9%	△10.2%	△16.7%

※いずれも2010年度は補正予算